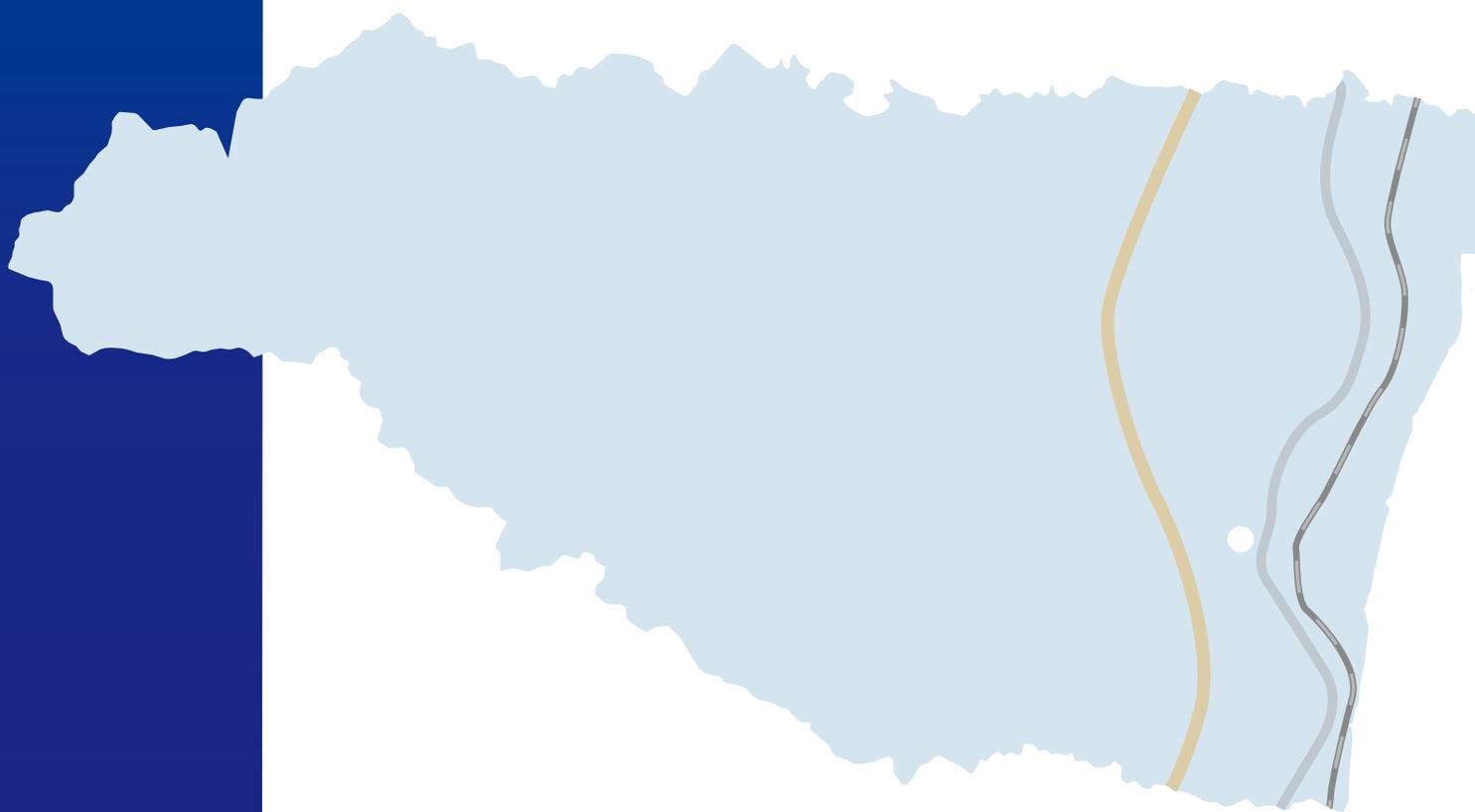


Ⅲ 証言「あのとき私たちは」 ～30人の証言～





避難当初は ご飯が食べられない日も

おおわだ まこと
大和田 慎さん
(広野町社会福祉協議会 事務局長)

震災時は休暇中で家族と一緒に出かけ
ていました。地震発生後すぐにでも戻りた
かったのですが、高速道路が閉鎖されたた
め、千葉県から約15時間かけて福島県に
戻ってきました。携帯電話で広野町社会福
祉協議会の状況を確認したら、デイサー
ビスセンターの利用者さんと津波で避難
してきた高齢者7人を連れて、いわき市
の草野小学校に避難していました。13日
の朝合流して、デイサービスセンターの
所長と2人でしばらくの間、高齢者のお世
話をするようになりました。車いすの人
や認知の人もいたのですが、みんな今後
どうなるんだろうと不安な様子でした。
食事については、自衛隊が水とおにぎり、
炊き出しを小学校で配ってくれました。

おにぎり1人1個を高齢者に渡してまた
並ぶということを繰り返し、何とか高齢者
分を確保しましたが、私たち職員の分は手
に入らず、2日間ぐらいは何も食べずにし
のいでいました。

小学校は和式のトイレしかなく、車いす
の人もいたので、町長に掛け合って13日
の夜に広野町老人福祉センターへ戻りまし
た。

そこには厨房施設があり、水も若干はあ
り、さらに役場に行って支援物資をもらい
ましたし、お弁当屋さんが開いていたので
温かいおにぎりを購入できました。15日
に役場ごと小野町に避難することになり、
ついていくことになりました。

小野町の避難所では、最初は食料は少な
く、お風呂にも入れず、とても寒いのにス
トーブをたきたくても油がないというよう
な状況が、1週間か10日間は続いていま
した。

私も何日間かご飯が食べられず、体育館
にある町の対策本部ですら賞味期限の切れ
た菓子パン2個というような日が続きまし
た。

そののち、支援物資でカップ麺が届き、
自前で炊き出しが始まって、温かい味噌汁
が出た時はみんな拍手がおき、そのくらい
うれしかったです。お年寄りも、冷たいお
にぎりをかじっていたときとは、表情が
まったく違いました。2週間くらいたつと
役場の方も落ち着いてきて、近くの商店街
からお肉を頼んだり、食事の内容もだい
ぶ良くなってきました。お風呂も、小野町
の施設が無償で提供してくれました。



患者さんと一緒に避難生活

おがやま ひろゆき
小鹿山 博之 さん
(馬場医院 院長)

私は震災の翌日から、妻の実家などに避難しましたが、金沢の実家に家族を預けて、3月18日に福島に戻りました。

一次避難所である小野町体育館から二次避難所である借り上げ旅館と、町の人たちと寝起きを共にしました。

血圧を測ったり、薬を配布したりするだけで、それ以上の何ができるわけでもありませんでしたが、いないよりはましだろうとの思いからでした。

応急仮設住宅が完成するころ、広野町のインフラも復旧し、私は平成23年8月に自宅に戻りました。以来、町に戻られた方々の診療と応急仮設住宅への訪問診療を2日、後方支援病院の手伝いを2日という変則的なスケジュールで始めましたが、町への帰還者が増えるのに合わせ広野町での診療時間を増やし、そんなこんではや4年がたとうとしています。私は、町の方々と一緒に働けたこの時間を本当にうれしく、感謝の気持ちを持って思い返しています。

自宅に戻られることを切望しながら、ついに避難先でお亡くなりになった方も多く、その無念さはいかばかりであったかと思えます。今回の原発事故の罪深さに改めて憤りを覚えます。「絶対安全とあれほど大見えを切っていたのはいったいなんだったのか」との思いは多くの方に共通のもの

だと思えます。しかしその一方で、二次避難所の温泉宿にお世話になっていた時、朝方誰もいない大浴場で鏡面のような水面をぼんやり眺めていて、ふと考えました。差し渡し約10メートルの大浴槽を太平洋に見立てると、200万分の1のスケールです。

すると、あの高さ20メートルともいわれる大津波は、0.01ミリメートルでもはや観察不可能です。考えられないほどの甚大な被害をもたらした今回の津波を、われわれは「未曾有の」とか「想定をはるかに超えた」と嘆き、自然の仕打ちの過酷さを呪います。

しかし、不謹慎な言い方かもしれませんが、太平洋はあの日もいつもと同じ海だったのではないのでしょうか。このことを先日恩師に話してみたら「自然は人間が対峙できる相手じゃない。東電の予測の甘さや事前の対策のお粗末さが非難されているけれども、本質的な問題とは思えない」と言われました。

仕方がなかったのだから諦めろなどと短絡的な結論に持っていくつもりは毛頭ありませんが、不毛な責任者の糾弾はそろそろ終わりにし、実効ある復興への努力にこそ力を注ぐべきだと思います。



働いていた工場は再開できず

かげ やま とし お
影山 年雄 さん
(楢葉町の職場で被災)

東日本大震災当時は楢葉町にある縫製工場に勤務していて、平成23年3月11日は勤務中に最初の地震が発生しました。

立て続けに3回大きな揺れが来て、工場 で働いていた人はほとんど外に逃げました。

私は10メートル以上もある重い裁断機などを倒れないように支えていました。

下駄箱のそばで震えている2人に外へ出るよう叫びましたが、萎縮して動けません。

運良く下駄箱は倒れませんでした。

停電で機械が止まったため、午後3時ころにはみな帰りました。

何も情報がなかったなので、翌12日も仕事に出ましたが、会社で南の方へ逃げるよう役場からの放送があったと聞いて、午前9時ころから車3台でいわき市へ逃げました。

避難所を回ると草野小学校、平第三中学校はいっぱい、最後に行った高久北小学校に着いたのが午後9時ころでしたから、12時間走っていたことになります。

楢葉町の人はこちらから会津に向かうこと

になりましたが、広野町の方は福島工業高等専門学校に行くよう言われ、福島高専へ行きました。

福島高専は水が出なかったので、17日ころから10日間くらいいわき市勿来の姉の家に身を寄せました。

それからまた福島高専に戻り、いわき市内のホテル浜徳、石川町の八幡屋、いわき市新舞子のかんぽの宿を転々とし、最後に応急仮設住宅に落ち着きました。

工場と一緒に働いていた人はバラバラになり、社長も避難して楢葉町の工場は再開できません。

私は震災後病気になって働けなくなりました。

今までやっていた仕事なら辛うじてできるかもしれませんが、これから新しい場所へ移って、別の縫製工場で働くこともできないし、その意志もありません。

災害に対する賠償のあり方は、根本的に変えてもらいたいと思っています。



絶対ということは この世の中にな

かざわ いちろう
賀澤 一郎 さん
(自宅で被災)

私は震災後、津波警報のため自宅に入らず、最初は町内の親せき宅に身を寄せました。3月15日に津波警報が解除されたので、午前5時ころ自宅に戻ってがれきの山から運転免許証と健康保険証を見つけたのが午前11時ころでした。11時25分ころ避難を呼びかける防災無線を聞き、まっすぐ福島工業高等専門学校へ行きましたが、スクリーニングで着替えろと言われました。このときの放射線量は毎時50マイクロシーベルトとも言われています。

17日、福島高専から三郷市の瑞沼市民センターに入りましたが、そこでこれでもかというくらいのもてなしを受けました。

最初はおにぎり弁当でしたが、普通の食事ができるようになり、そのうちおやつまで出るようになって、こんなにしてもらっていいのかなと思うくらいでした。

避難所に入った次の日から、近所の人 がトイレットペーパーあるから持ってきたよとか、ティッシュペーパー余ったのがあるから持ってきたよといった具合で、見る間に物を置く部屋がいっぱいになりました。

避難所にいてもやることがないので、夜、酒を飲みに行く人、昼間パチンコをやる人がいて、女性は化粧して買い物へというようななかで、4月末、三郷市の社会福祉協議会の集まりがあったとき、その席上で避

難民とはいえ、このような生活実態を見てどうして世話をしなければならないのかという話があったと、後で役場職員から聞きました。その話を聞いた当時は、私たちは原発が壊れやむなく避難しているという、被害者意識しか頭にはありませんでした。何もやることがないなかで、しょうがないだろうなという気持ちでしたが、時間がたった今では、それはそうかもしれないという思いにはなっています。

日本の科学技術は素晴らしいものだと言われてきて、原子力発電所についても絶対安全だと言われてきました。私も東京電力の子会社に20数年勤めていて、発電所の中で働いていました。作業員さんの安全を確認してから工事を始めるのですが、発電所は絶対事故は起きないという前提でした。

今にして思えば、そんなことはありえないだろうと思います。絶対ということは、この世の中にはないんだという前提で生活を組み立てていくことが大切だと思います。

ドイツでは原発を最終的にどう解体するのかを決めてから動かしてきたので、今予定どおりの解体をしているといえます。日本では間違いなく見切り発車で、最終処分地下に何十万年も埋めることに誰が責任を持つのだろうかという疑問に思います。責任を持ってないことはやるべきでないと思います。



何かしたくて思いついた炊き出し

かなり
金成 サキさん
(炊き出しに参加)

平成23年3月11日に地震が起こったときは、買い物の帰りで自宅近くのJAふたば広野支店の辺りにいました。持病があるため、最初地震だということが分からず、目まいだと思いました。帰宅して玄関を開けると家の中はめちゃめちゃになっていて、飼い犬を呼んでも出てきませんでした。停電はしていませんでしたが、電話は通じませんでした。

外に出て近所の人と立ち話をしているとザワ〜と音がしました。その時海の方を見ると津波が線路の近くまで来ていたので、急いで丘の上の広野町老人福祉センターへ歩いて逃げました。普段から日本赤十字社の奉仕活動でなじみがあったのと、そこへ行けば何かできると考えたのです。

老人福祉センターには炊き出しができる道具と材料がそろっていたので、係の人たちが「炊き出しをしよう」と話し、汁物なら500食分くらい入る大きな鍋を使って、屋外で豚汁を作りました。ほかのグループ

はおにぎりを作っていました。料理している途中に、目まいがしたので休んでいると、海を見ていた人たちが津波の恐ろしさを話していました。夕方豚汁を配って、近くの広野町保健センターでおにぎりをもらいました。老人福祉センターは停電、断水の状態でしたが、その晩はそこに泊まりました。

翌日原発事故が発生したと聞かされ、老人福祉センターのバスで石川町の総合体育館に避難しましたが、近所の人と一緒にだったので、とても心強かったです。犬は近所の人が見つけて、連れてきてくれました。

石川町には2週間くらいいて、身内に誘われて東京都、埼玉県、小野町と移りましたが、避難先の住宅事情や通院の都合があり、いわき市の応急仮設住宅に落ち着きました。震災後は娘から携帯電話を預けられ、今は便利に使っています。

あの時は、石川町の皆さんや多くの人のお世話になり、感謝しています。